



「文化を創る」

滋賀県に今春、明るい話題が広がりました。大津市在住の小説家、宮島未奈さんのデビュー作『成瀬は天下を取りに行く』が2024年本屋大賞を受賞されたのです。県内では6月まで作品のゆかりの地を巡るデジタルスタンプラリーのイベントも開催され、地域の盛り上がりにも一役買っていたと思います。近年の文学賞では同じく大津市在住の小説家、今村翔吾さんが22年に『塞王の楯』で直木賞を受賞されました。また、滋賀県出身の毎日新聞論説委員、小倉孝保さんが最近上梓した『35年目のラブレター』が映画化されて来年3月に公開予定であり、楽しみにしています。文学や音楽、伝統工芸など多彩な分野で活躍されている滋賀県出身・在住の方は数多く、歴史と自然と近江の地で暮らす人々の魅力を総合した郷土の文化力を誇らしく思っています。

宮島さんと今村さんは、受賞前に本誌『かけはし』の「滋賀人」の欄に登場していただきました。本誌は、地域経済の活性化と文化の振興を目的に設立した「しがぎん経済文化センター」が企画・編集をしており、同社は、今年3月に創立40周年を迎えました。設立当時、地域文化の振興を目指す銀行子会社の設置は先駆的な取り組みであり、4年後の1988年に完成した本店ビルに併設している多目的ホールでの演奏会などさまざまな企画を通じて、「経済」と「文化」を両輪とする地域活性化に一貫して取り組んできました。長く住みたいと思える地域には、安定的な経済の発展とともに、人生に充実感をもたらす文化との触

れ合いも欠かせないものとして、40年にわたって地域社会のデザインに関わっています。

文化とは、社会の風習や伝統、思考方法や価値観、生活様式などの総称であり、世代を通じて伝えられていきます。新しい価値を生み出す創造力の源泉でもあり、経済活動や企業経営にも大きな影響を及ぼす資本の一つと捉えることができます。今春にスタートした当行の第8次中期経営計画では、「挑戦」と「称賛」の企業文化を醸成すると前号の本欄で紹介しました。実はもう一つ、当行グループは新しい企業文化の醸成に挑戦します。それは「データ活用文化」です。データ活用の本質は、隠れた価値を見つけ、それを形にして実現することだと考えます。8次中計では、データドリブンプロジェクトチームを設置し、「経験と勘の蓄積」×「データ分析」で経営の効率化やお客さまの利便性の向上、営業力の強化を図ります。デジタルテクノロジーを駆使して経営の在り方を再構築するDX（デジタルトランスフォーメーション）を推進するために、データドリブン経営は必須の取り組みです。データに基づいた迅速な意思決定や戦略立案を行う体制を整えることが、新たな価値創造につながります。

「『三方よし』で地域を幸せにする」というパーパス（存在意義）の実践に向け、「健全」と「進取」という当行の伝統的な企業文化に新たな企業文化を融合し、8次中計に掲げた「地域を幸せにする好循環」の創出に努めてまいります。これからも、ご支援をよろしくお願い申し上げます。